訳者解説

教皇庁教理省教理に関する覚書『信じる民の母――救いのわざへのマリアの協力に関連するマリアのいくつかの称号について』について

1）本文書の意味と目的

教皇庁教理省教理に関する覚書『信じる民の母――救いのわざへのマリアの協力に関連するマリアのいくつかの称号について』（*Mater Populi fidelis: Nota* dottrinale su alcuni titoli mariani riferiti alla cooperazione di Maria all’opera della salvezza）は 2025 年 11 月 4 日に公布された。

邦訳で 400 字 140 枚を超える、相当な分量の文書である。注も 197 あり、聖書を含む引用は計 356 回。内訳は以下のとおりである。

聖書　115 回。うちルカ 36 回［10.1%（聖書中 31.3%）］、ヨハ 35 回［9.8%（聖書中 30.4%）］。
教父　87 回［24.4%］。うちトマス・アクィナス 40 回［11.2%（教父中 46.0%）］（うち『神学大全』20 回［5.6%］）。
教皇　103 回［23.9%］。うちヨハネ・パウロ二世 33 回［9.3%（教皇中 32.0%）］（うち『救い主の母』21 回［5.9%］）。
公会議・司教会議　37 回［10.4%］（うち『教会憲章』28 回［7.9%］）。
その他の公文書　5 回。
教皇庁　8 回。
その他　1 回。

ビクトル・マヌエル・フェルナンデス教理省長官が文書公布時に発表した「解説」（Presentazione）――これは本文に含まれないが、文書冒頭の短い「本文書について」（Presentazione）はこの「解説」の要約である。邦訳では両者を区別するために長い Presentazione を「解説」とした――は、文書の内容を詳細に説明している。

> 明らかなとおり、この『覚書』の標題における「教理に関する」という表現は、本文書が特別な価値をもち、最近 2 年間に公布された他の文書よりも上位のものであることを示しています。教皇が署名した本文書は、教会の通常教導職に属し、マリア論の議論の研究と探究との関連で考慮されなければなりません。（「解説」）

文書の意味と目的

……本文書は、とくに最近30年間に聖座に寄せられた、マリア信心とマリアのいくつかの称号に関する多くの質問や提案に答えるものです。それゆえ、これらの質問や提案は、総会や定例会議のような教理省の検討のさまざまな場で繰り返し取り扱われてきたものです。

したがって、すでに教理省長官ラッツィンガー枢機卿（1927－2022年）の時代に、この議論に関する入念な検討が行われていました。当時、将来のベネディクト十六世は、定例会議委員とともに、個人的にもこの探究に関与し、そこから教皇聖ヨハネ・パウロ二世（1920－2005年、位1978－没年）が特別な関心を寄せた分析が生まれました。この検討は関係者が公表しなかった結論をもって終了しましたが、その根本的な概念はラッツィンガー教理省長官の後の書物の中で再確認されました。

これは、本文書の背景にある数十年の豊かな歴史を確認させてくれる重要な一例にすぎません。それゆえ、教理省はこの長期にわたる検討のいくつかの結論を公表する時期が来たと判断しました。（同上）

なぜ今、「公表する時期が来たと判断」されたかについては「解説」や本文でも明示されていない。しかし、本文書でその使用が「不適切」だとされる「共同のあがない主」（Corredentrice）が実際には教皇ヨハネ・パウロ二世によって7回使用されており（本文書18）、同時にJ・ラッツィンガー教理省長官（教皇ベネディクト十六世）によってこれについて否定的な見解が個人的に表明され（同19）、教皇フランシスコもこの称号に反対した（同20）という経緯を踏まえて、教理省は慎重に公表のタイミングをはかったのでないかと想像される。いずれにせよ最近の教皇によって立場が分かれた微妙なテーマである「共同のあがない主」に関して教導職が正式な見解を表明した点で、本文書の重要性は大きいといえる。

……本日公布する本文書は、マリアのいくつかの称号に関する問いに答えますが、そのテーマは何よりもまず、マリアとわたしたちの関係です。すなわちわたしたちは、神のことばの光に照らして真のマリア信心について語っているのです。そのため、本文書全体を通して基盤となっているマリア的なモチーフは、〈信者に対するマリアの母としての愛〉（la maternità di Maria nei confronti dei credenti）であり、それが本文書全体に繰り返し見られる問題です。ある言い回しや表現がライトモチーフとして文書全体に繰り返し見られるとき、それが読解の鍵となります。

信者の信心（la devozione dei fedeli）（これが中心テーマです）を引き起こす、わたしたちに対するマリアの母としての愛は、わたしたちがマリアについて語ることができる、きわめてすばらしく重要な二つの根本的な側面をもっています。第一は、さまざまなかたちで表される母としての近さ（vicinanza materna）であり、第二は、つねにわたしたちに同伴する母としての執り成し（intercezione materna）です。それゆえ、わたし

たちの人生にとってのマリアの具体的な意味を強調するために他の概念を発明する必要はありません。

本『覚書』は、まさにこの信心の価値を認識しようとするがゆえに、聖書におけるマリア信心について広く考察します。こうしてマリア信心が教会の発明でも、たんなる心理的ないし文化的な所産でもなく、信者における聖霊のわざであることが確認されます。(同上)

素朴な人々の信仰を愛すること

本文書のライトモチーフは上記のとおり〈信者に対するマリアの母としての愛〉であるが、一方で、この愛の受け手としての信者——具体的には、「素朴な人々」(semplici)——が本文書のもう一つの中心的なモチーフである。

マリアの母としての愛が引き起こすマリア信心は、本文書において教会の宝として示されます。この『覚書』は、マリアのうちに歓待と励ましと優しさと希望をつねに見いだす民衆的なマリア信心への賛歌ということができます。わたしたちはこの貴い信心を評価し、そこに美を認め、この信心を引き起こす聖霊に感謝します。

わたしたちは、神学の授業を受けていないとか、教会組織に参加していないからといって、素朴なキリスト信者を二流の信者と判断するつもりはありません。その反対に、わたしたちは、彼らから、そのみずみずしい信頼と、ためらいなしに身をゆだねる力と、主と聖母に対する自発的な愛の生き生きとした優しさを学びたいと望みます。

彼らの多くは、超越者の存在を疑わず、神が存在するかを議論せず、自分たちを超えた神秘を必要としていることを確信をもって知っています。そして、アパレシーダでラテンアメリカの司教たちが述べたとおり、貧しい人々は「マリアのみ顔において神の優しさと愛と出会う。彼らはマリアのうちに福音の本質的なメッセージが反映されているのを見いだす」(『アパレシーダ文書(2007 年 6 月 29 日)』265)のです。

教皇フランシスコがしばしば思い起こしたとおり、信じる民は、マリアに近づくとき、キリストからも福音からも離れていません。むしろ彼らはいつも「この母のイメージに、福音のすべての神秘を読み取」(教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び』285[*Evangelii gaudium*])ることができるのです。

このような信仰は、ことばや理論や説明によるものではなく、むしろ、聖霊ご自身が信者のうちに自由に引き起こす、主に信頼する福音的な態度の秘義教育的・象徴的な表現として、独自の表現方法をもっていることを理解しなければなりません。そして、このような態度はナザレのマリアと強く結びついています。

マリア像を花や金や栄光で飾ることができる信者は、マリア像によって歴史的なマリアがたたえられることを決して忘れてはいません。この歴史的なマリアは、わたしたちが福音書の中に見いだす、わたしたちの一人であるかたです。マリアは、普通の女性と同

じように、御子を胎内に宿し、乳を飲ませ、愛をこめて育て、母としてのさまざまな問題を経験しました（ルカ 2・48－50 参照）。（同上〈素朴な人々の信仰を愛すること〉）

民の母

この「民」のマリア信心こそが、本文書の中心的なテーマである。文書は教皇フランシスコに倣って、民の信仰への評価を『アパレシーダ文書』に基づいて提示する。

本文書の標題（*Mater populi fidelis*）は、マリア信心がたんなる個人的・内面的な問題ではないこと、むしろ、マリア信心が信者の民の力であることを示します。

民は、個人の集まりではなく、わたしたちがともに織り上げる織物です。そこでは、ある人の信仰が他の人の信仰を促し、自分たちの信仰をともに表し、共同体的生活が自分たちを支えます。民間信心において、こうした側面は巡礼によってとくに示されます。『アパレシーダ』文書はそのことを次のように説明します。

「われわれは巡礼を強調する。そこには旅する神の民が見いだされるからである。信者は、自分たちを待っている神へとともに歩みながら、多くの兄弟の中に溶け込むことを感じる喜びを祝う」。

しかし、共同体的な経験であるから、巡礼の経験が驚くべきしかたで個人的かつ親密な経験であることを意味するわけではありません。『アパレシーダ文書』は続けてこう述べます。

「到着は愛の出会いである。巡礼者のまなざしは、神の優しさと近さを象徴する像に向けられる。愛は立ち止まり、神秘を観想し、それを沈黙のうちに味わう。愛も心を動かされ、自らの苦しみと夢の重荷のすべてを現す。信頼から流れ出る心からの祈願は、一人では何ごとも実現できないことを認めることによって自己満足を捨てた心の最高の表現である。短い一瞬が生き生きとした霊的経験を凝縮する」（『アパレシーダ文書』259）。

注意しなければならないことがあります。『アパレシーダ文書』は、巡礼者が到着し、聖母のまなざしの前で、「愛は立ち止まり、神秘を観想し、それを沈黙のうちに味わう」と説明しています。それは無価値なマリア的宗教性ではありません。（同上〈民の母〉）

マリアのいくつかの称号に関する明確化

このような関心の下に、本文書の特定の目的が示される。

このような文脈において、初めて、マリアのいくつかの称号の正統性や価値を明らかにすることへの懸念を適切に理解することができます。

なぜなら、普及した民間信心以外に、マリアから霊感を受けたいくつかのグループ、出版物、新しい信心の形態、マリアの称号について述べるマリア教義へのさまざまな要請が存在するからです。これらがオンラインで多数存在することが、素朴な信者の中にし

ばしば疑念を引き起こしています。

そのため、本文書はこうした提案を考慮に入れます。それは、いかなる意味でマリアのいくつかの称号が福音から霊感を受けた真のマリア信心にこたえるか、あるいは、いかなる意味で、キリスト教のメッセージと調和する適切な理解を促すものでないがゆえに他のマリアの称号を避けるべきかを示すためです。

本文書は、マリアの美しさを新しい方法で表現しようと試みる——誠実で信仰に満ちていることは確実な——これらのグループや個人の意図を判断するものではありません。（同上〈マリアのいくつかの称号に関する明確化〉）

具体的に本文書がとくに考察の対象として取り上げるのは〈共同のあがない主〉と〈仲介者〉という称号である（これ以外の表現についても考察される）。

本文書は**「共同のあがない主」（Corredentrice）**という称号に関して、当時のラッツィンガー枢機卿が表明した意見を反映して、それは「つねに不適切であり」（è sempre inappropriato）、「不都合なものとなる」（diventa sconveniente）と結論づけました。

「仲介者」（Mediatrice）という称号に関して、本『覚書』は、いかなる意味でこれが受け入れがたいものであり、また、いかなる意味でそれが価値をもつかを説明します。（同）

こうした判断基準となるのは、イエス・キリストによる救いの唯一性である。

「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。このかたはすべての人のあがないとしてご自身をささげられました」（一テモ２・５－６）。

それゆえ、この中心的な確信が弱められるなら、聖母へのいかなる崇敬を行うこともできません。教会はキリストのこの独自の位置を、キリストは永遠にして無限の御子であるがゆえに、ご自身がとった人性はキリストと位格的に一致しているという事実によって説明してきました。この位置はキリストの人性に限定され、そこから生じる帰結はキリストにのみ適用可能です。このことは、別の意味で、御子がマリアを「仲介への参与」にかかわらせることを排除するものではありません。（同上）

そこから**〈すべての恵みの仲介者〉（Mediatrice di tutte le grazie）**という称号の解釈の方法も示される。

したがって、「すべての恵みの仲介者」という称号も、適切に解釈されなければなりません。それは、マリアがわたしたちとキリストの間に〈位置づけられ〉、自ら恵みを注ぐ

と考えたり、マリアがキリストよりも近くにいるとみなしたり、さらには、キリストが完全に欠けることなく恵みを注ぐためにマリアを必要としていると想像したりするのを避けるためです。また、この称号は、マリアが、優しく愛し、ゆるすことのできない神の怒りを鎮めるための「避雷針」(parafulmine) であるかのような考え方で解釈されてはなりません。(同上)

最終的に本文書の目的は「マリアに対する信者の愛と、マリアの母としての執り成しへの信頼に寄り添い、それを支えること」という司牧的なものであることが示される。

最後に、本『覚書』は、マリアに対する信者の愛と、マリアの母としての執り成しへの信頼に寄り添い、それを支えることを目指しています。同時に本『覚書』は、この信仰が新鮮さと福音の香りを失うことを避けるよう努めます。こうして、信者の信仰は、信者の大多数が関心をもたない諸問題によって複雑なものにされたり、また、マリアに対する彼らの愛に何ら本質的なものを付加することなしに、守られます。この愛は、自由な聖霊が民の心のうちにつねに生み出すものです。(同上)

２）本文書の構成

本文書は以下の目次のとおり、「序文」の後に、総論として「救いのわざへのマリアの協力」について述べ、その後、各論として「マリアの救いへの協力に言及する称号」としての「共同のあがない主」「仲介者」「信じる者の母」「恵みの母」を取り上げる。最後の「信じる民の母」は結びである。

本文書について
序文（1-3）
救いのわざへのマリアの協力（4-15）
マリアの救いへの協力に言及する称号（16-）

共同のあがない主（17-22）

仲介者（23-33）
　キリストの唯一の仲介におけるマリア
　栄光のキリストのうちに実を結ぶ

信じる者の母（23-44）
　執り成し

母としての近さ

恵みの母（45-75）
神のみが達することができる場所（55-55）
流れ出る生きた水（56-61）
世において自らを伝える愛（62-63）
いくつかの基準（64-66）
もろもろの恵み（67-70）
わたしたちのマリアとの結びつき（71-72）
最初の弟子（73-75）

信じる民の母（76-80）
愛は立ち止まり、神秘を観想し、沈黙を喜ぶ（77-80）

救いのわざへのマリアの協力

文書は初めに、「救いのわざへのマリアの協力」（La cooperazione di Maria nell'opera della salvezza）について聖書・教父・公会議の教えを振り返る。

> 伝統的に、救いのわざへのマリアの協力は二つの観点から取り上げられてきました。すなわち、キリストがその生涯において、とくに過越によって実現した〈客観的な〉(oggettiva)あがないへの参与という観点と、あがなわれた人々に対してマリアが〈現実に〉（attualmente）行使する影響から出発する観点です。実際には、これら二つの観点は互いに関連し合い、単独で取り上げることはできません。（4）

「マリアがわたしたちの母であることは、キリストの過越によって実現される神の計画の完成の一部」（6）であり、「キリストの使命とマリアの使命の間にある切り離しがたいつながり」（8）にわれわれは気づく。教会教導職は次のことを明らかにした。

> 救いのわざにおける聖母の御子との協力は、教会の教導職によって明らかにされました。第二バチカン公会議が述べるとおり、「したがって、聖なる教父たちが、マリアは単に受動的に神に用いられたのではなく、自由な信仰と従順をもって人類の救いに協力した、と考えているのは正しい」。この協力は、イエスの地上での生涯（受胎、誕生、死と復活）だけでなく、教会の時代においても存在します。（13）

このような「救いのわざにおけるマリアの協力は三位一体的な構造をもっている」。

なぜなら、それははしための〈小ささ〉に目を留めた（ルカ1・48参照）御父の働きかけの実りであり、しもべの形をとってへりくだった（フィリ2・7−8〔聖書協会共同訳〕参照）御子の〈ケノーシス〉から流れ出、ナザレのおとめの心を、お告げのときだけでなく（ルカ1・28、30参照）、御子と交わる生涯全体において、応答できるように準備した聖霊の恵みの結果だからです。（15）

共同のあがない主

「教皇聖ヨハネ・パウロ二世は少なくとも7回、この称号を用い、それを、キリストの苦しみとともにささげられるわたしたちの苦しみの救済的な価値と結びつけました。マリアはとくに十字架の下でキリストと一体化するからです」（18）。しかし、ラッツィンガー枢機卿（教理省長官）はその後、この称号に対して否定的な見解を明らかにする。

1996年2月21日、当時の教皇庁教理省長官のヨゼフ・ラッツィンガー枢機卿は、すべての恵みの共同のあがない主ないし仲介者としてのマリアに関する教義を決定することに関する〈仲介者マリアの民の声〉（Vox Populi Mariae Mediatrici）運動の要請は受け入れられるかという問いに対して、個人的な〈意見表明〉（votum）によって次のように答えました。「〈受け入れられない〉。称号の正確な意味があいまいであり、その中に含まれる教理が成熟していない。〈神的信仰によって〉（de fide divina）定義される教理は、〈ゆだねられた信仰の遺産〉（depositum fidei）、すなわち、聖書と使徒的伝統によって伝えられる神の啓示に属する。称号によって表される教理が聖書と使徒的伝統の中にどのように存在するかは明らかではない」。その後2002年に、ラッツィンガー長官はこの称号に反対する意見を公式に表明しました。「『共同のあがない主』という定式は聖書と教父のことばからあまりにもかけ離れており、それゆえ誤解を招くものである。……とくにエフェソの信徒への手紙とコロサイの信徒への手紙が述べているとおり、すべてはキリストに由来する。マリアにとってもすべてはキリストに由来する。『共同のあがない主』という用語はこの起源をあいまいにするものである」。ラッツィンガー枢機卿は、この称号を使用する提案における善意と貴重な側面を否定しませんでしたが、それは「誤った用語」であると主張しました。（19）

さらに「教皇フランシスコは、少なくとも3つの場面で、〈共同のあがない主〉という称号の使用にはっきりと反対する立場を表明しました」（21）。本文書は〈共同のあがない主〉という称号の使用に関して次の結論を示す。

あがないのわざにおけるマリアのキリストに対する従属的な役割を説明しなければならないならば、マリアの協力を定義するために〈共同のあがない主〉という称号を使用することは〈つねに不適切〉です。この称号はキリストの唯一の救済的仲介をあいまい

にするおそれがあり、それゆえ、キリスト教信仰の真理の調和に混乱とバランスの欠如をもたらす可能性があります。なぜなら、「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです」（使 4・12）。ある表現が、正しい意味から離れることを避けるために、多くの継続的な説明を必要とする場合、それは神の民の信仰の役に立たず、〈不都合なもの〉となります。この場合、この表現はマリアをあがないと恵みのわざの最初で最大の協力者としてたたえるために役立ちません。なぜなら、わたしたちの救いのために人となられた神の子であり、御父に限りない価値をもついけにえをささげることのできる唯一のかたであるイエス・キリストの排他的な役割をあいまいにする危険は、マリアへの真の崇敬とならないからです。（22）

仲介者

「「仲介」（meditazione）という概念は、6 世紀以降、東方教父によって用いられます」（23)。〈仲介者〉の称号をマリアに適用することに関する本文書の結論はこれである。

24　キリストの排他的な仲介に言及する聖書の表現は決定的です。キリストは唯一の仲介者です。「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。このかたはすべての人のあがないとしてご自身をささげられました」（一テモ 2・5－6)。教会は、このキリストの独自の位置を、キリストは永遠かつ無限の御子であるため、ご自分がとられた人間性と位格的に一致しているという事実から説明しました。この位置はキリストの人間性によって排他的であり、したがって、そこから生じる帰結はキリストにのみ当てはめることができます。この正確な意味で、受肉したみことばの役割は排他的で唯一です。この明快な啓示されたことばに照らして、「仲介者」という称号をマリアに適用するに際しては特別な慎重さが必要です。マリアの協力の意味を広げようとする傾向に対して、その貴重な意味とともに限界を明確にすることが適切です。

27　……わたしたちは厳密な意味で、受肉した神の子の仲介以外の、他の恵みの仲介について語ることはできません。そのため、「その受肉と死、復活の出来事をもって救いの歴史を完成し、ご自分の中にその歴史の充満と中心を有しておられる、神の子であり、主であり、唯一の救い主であるイエス・キリストの真理」を「教会の信仰の変わらぬ要素として堅く信じなければならない」というキリスト教の確信を、隠さずにつねに思い起こす必要があります。

信じる者の母（34-44）

「信じる者の母」のパラグラフ（34-44）は「マリアの霊的な母性」（34-37）「執り成

し」（38-42）「母としての近さ」（43-44）に関する積極的な解説である。

「マリアの場合、この仲介は〈母としての〉（materna）形で実現されます」（34）。「〈母〉（Madre）という称号は聖書と教父に根ざし、教導職によって提示され、その内容の定式化は第二バチカン公会議の説明や回勅『救い主の母』（*Redemptoris Mater*）における〈霊的次元での母性〉（*maternità spirituale*）という表現へと発展しました」（35）。

「マリアの**霊的な母性**にはいくつかの決定的な特徴があります」（37）。すなわち、「a）マリアの霊的な母性の基盤は、マリアが神の母であり、この母性をキリストの弟子と全人類に対して延長することのうちにあります。この意味で、マリアの協力は独自であり、「他の人たち」の協力と区別されます」。「b）マリアの母としての協力はキリスト〈のうちに〉行われ、それゆえ〈参与的〉です。すなわちそれは、「キリスト自身の仲介という唯一の源泉に参与するもの」です。マリアはキリストの唯一の仲介に完全に個人的なしかたでかかわります。……それゆえ、あたかもマリアが神のあわれみが不十分なために必要な代替物であるかのように、マリアを主の正義に対する一種の「避雷針」（parafulmine）として示す、マリアに関する称号や表現を避けなければなりません」。「c）教会はマリアの霊的な母性にとっての基準であるだけではありません。まさに教会の秘跡的次元がマリアの母としての役割がつねに表される場なのです。マリアは教会とともに、教会のうちで、教会のために働きます。マリアの母性の行使は教会の交わりにおいてなされるものであり、教会の外でなされるものではありません。マリアは教会を導き、教会に同伴します。教会はマリアから自らの母性を学びます」（37）。

「執り成し」（intercessione）については、聖書の証言に基づきながら、次の説明がなされる。

> 42　キリストとともに選ばれ、栄光を受けた人々の中で、聖母マリアは第一の位置を占めます。そのためわたしたちは、キリストがご自身の教会の中で成し遂げる救いのわざにマリアが独自の協力を行うことを断言できます。この執り成しによって、マリアは主のあわれみの母としてのしるしへと変わります。こうして、主は、ご自身が自由に望まれたがゆえに、わたしたちに対するみわざに母のみ顔を与えるのです。

「母としての近さ」（vicinanza materna）については聖ホアン・ディエゴのグアダルペの聖母の体験が例として示される。しかし、「教会にとってマリアの価値はきわめて大きいため、司牧者はこのようなマリアの近さを政治的に利用することをいっさい避けなければなりません」（44）。

「恵みの母」（Madre della grazia）（45-75）は本文書でかなりの割合を占め（全 80 節中、39%、字数［邦訳 13440 字］でも本文全体［邦訳 35869 字］の 37%）、おもにトマス・アクィナスの恩恵論に基づいて詳細・緻密な分析がなされている。本文書の問題意識は導入

部の 45 に示されている。

> 45　このような「信者の母」（Madre dei credenti）に関する理解は、マリアの働きをわたしたちの恵みの生活との関連において語ることも可能にします。しかしながら、神学的に受け入れうるある種の表現に、実際には容認できない別の内容を伝えるイメージや象徴が容易に含まれていることを指摘しなければなりません。たとえば、マリアが神と切り離された〈恵み〉を託されているかのように示されることがあります。この場合、主がその寛大で自由な全能の力によって、マリアではなくキリストのみ心という唯一の中心から流れ出る神のいのちの伝達とマリアを結びつけようと望んだことがはっきりと感じ取れません。また、マリアがあらゆる恵みがそこからほとばしり出る泉として示されたり思い描かれたりすることがしばしばあります。三位一体的な（父と子と聖霊の）内住（造られざる恩恵［gratia increata］）と神のいのちへの参与（創造された恩恵［gratia creata］）が不可分であることを考慮に入れるなら、この神秘がマリアの手を「通過」することによって条件づけられうると考えることは不可能です。この種の考え方は、キリストの中心性そのものが消失するか、少なくとも限定されるしかたでマリアを高めるものです。ラッツィンガー枢機卿は〈すべての恵みの仲介者であるマリア〉（Maria mediatrice di tutte le grazie）という称号は明確に神の啓示に基づくものではないと述べています。わたしたちはこの確信に従って、この称号が神学的考察においても霊性においても困難を伴うと認めることができます。

前提となるのは次の観点である。

> 46　こうした困難を避けるために、恵みの秩序におけるマリアの母性を〈恵みの準備（dispositiva）〉として理解すべきです。一方で、マリアの母としての執り成しは、その〈執り成し〉の性格のゆえに、「母の保護」（protezione materna）の表現です。この「母の保護」は、キリストが神と人間の間の唯一の仲介者であることを認めることを可能にします。他方で、マリアのわたしたちの生活における〈母としての現存〉（presenza materna）は、わたしたちの心を聖霊におけるキリストのわざに開くように促すマリアのさまざまな働きを排除するものではありません。こうしてマリアは、さまざまなしかたで、わたしたちが、主のみがわたしたちのうちに注ぐことができる〈恵みのいのちを準備する〉（disporci alla vita di grazia）助けとなるのです。

「神のみが達することができる場所」（*Dove solo Dio può arrivare*）（50-55）はおもにトマス・アクィナスの恩恵論に基づいて述べる。

神のみが成聖の恩恵（gratia sanctificans）を与えることが可能です。なぜなら、それは

「無限の」不均等を乗り越えることを意味するからです。この三位一体のたまもの、すなわち、この「霊魂のうちへの（神ご自身の）透入（illabitur)」は、信者のもっとも内なる部分を内的に変容させる効果を意味します。聖トマス・アクィナスは、この人間の内奥への浸透を表すために、神のみに当てはまる illabi（透入する）という動詞を用いました。なぜなら、被造物ではない神のみが、人格の自由とアイデンティティを侵害することなしに人格の内奥に達することができるからです。神のみが、人格の内奥に達することが可能です。(50)

したがって、「いかなる人も、使徒や至聖なるおとめマリアでさえも、恵みの普遍的な分配者（dispensatore universale della grazia）として行動することは不可能です。神のみが恵みを与えることが可能です」(53)。「マリアでさえも、恵みの伝達における人間と神との間の完全な直接性に介入することはできません。イエス・キリストとの友愛も、三位一体の内住も、マリアや聖人を通してわたしたちにもたらされるものとして考えることはできません。いずれにせよ、わたしたちにいえるのは、マリアがわたしたちのためにこの善を望み、わたしたちとともにそれを願うということです」(54)。

そこから、「プラトン主義的な、一種の恵みの段階的な注ぎを思い描かせるようないかなる表現も避けなければなりません。たとえば、神の恵みは特定の仲介者——たとえばマリア——を通して降り、恵みの究極的な源泉（神）はわたしたちの心から引き離されたままであり続けるといった表現です。このような解釈は、恵みが主と信者の心との間で実現する、親密、直接、無媒介の出会いに関する正しい理解に悪影響を及ぼします。事実、義化を行うのは神のみです」(55)。

「流れ出る生きた水」(*l'acqua viva che scorre*)（56-61)という表現に関連して、「マリアが有する恵みが「あふれ出る」という一種の考え方が容易に浮上します。これは、これまでに述べたことと矛盾しないかぎりにおいてのみ適切な意味をもつことが可能です。これがおもにすでに言及し（成聖の恩恵へと心を開くように招く母としての執り成しと近さ)、造られたものが「唯一の泉に参与しながら行う」さまざまな協働として第二バチカン公会議が示した、協力の形であるならば、いかなる困難を示すものでもありません」(56)。

「いくつかの基準」（*Criteri*）(65-66)

「恵みの秩序におけるこのマリアの協力を理解する他のすべてのしかたは——とくにマリアに何らかのかたちの介入、完成の手段、ないし成聖の恩恵の伝達における第二原因を帰することを意図する場合に——、すでに『教会憲章』(*Lumen gentium*) の中で指摘された、以下のいくつかの基準に特別な配慮を払う必要があります」(65)。

a) わたしたちは、マリアがどのようにわたしたちとキリストとの「直接の一致」を促すかについて考察すべきです。主がこの「直接の一致」を恵みを与えることにより実現するのであり、わたしたちは神からのみそれを受け取ることができます。しかしその場

合、マリアとの一致をキリストとの一致よりも直接のものとして理解してはなりません。このような危険は、とくに、キリストがわたしたちにマリアをご自身の恵みの伝達における手段ないし完全な第二原因として与えるという考え方のうちに見られます。
b）第二バチカン公会議は次のことを強調しました。「聖なる処女（おとめ）が人々の救いに対して及ぼす影響はすべて、客観的な必要性からではなく、神の好意から生じるものである」。この影響は神の自由な決定から出発して初めて考えることができるものです。神は、ご自身の働きがあふれるほど豊かであるにもかかわらず、マリアをご自身のわざと自由に無償で結びつけることを望まれます。そのため、マリアの働きを、神が救いのわざを行うためにマリアを必要としたかのように示すことは許されません。
c）わたしたちはマリアの仲介を、神がより大きな豊かさと美をもって完全に働くことができるための補足として理解してはなりません。むしろ、「唯一の仲介者であるキリストの尊厳と効力を何ら損なわず、何ものをも付加しないという意味において」それを理解しなければなりません。マリアの仲介を説明する際に強調しなければならないのは次のことです。すなわち、神は唯一の救い主であり、神のみが、わたしたちの義化のために唯一必要であり、完全に十分であるイエス・キリストの功績を適用するということです。マリアは、主がなさっていないいかなることにおいても主に取って代わることはありませんし（何ら損なわない）、主を補うこともありません（何ものも付加しない）。マリアは恵みの伝達においてキリストの救いの仲介に何ものも付け加えません。そうであれば、マリアをこのような恵みの贈与の一時的な道具と考えてはなりません。マリアはキリストご自身のわざによって、キリストの働きに同伴します。そうであれば、いかなるしかたにおいてもマリアの仲介をキリストの仲介と並行するものとして理解してはなりません。むしろ、マリアはキリストに結びつけられることにより、自らを超えたところに置かれるというたまものを御子から与えられます。なぜなら、マリアは母としての性格によって主のわざに同伴することができるからです。それゆえ、わたしたちはもっとも確実な点に戻らなければなりません。すなわち、マリアの〈準備的な〉貢献です。このことによってわたしたちは、マリアが他者を「何らかのしかたで準備させうる」かぎりにおいて何らかの貢献を行う働きを考えることができます。なぜなら、「究極目的にまで導くことは最高の能力に属するが、こうした究極目的の獲得を、その用意の整備によって助けるのが下位の諸能力である」からです。（同）

「それゆえ、マリアへのまなざしがわたしたちをキリストからそらしたり、マリアを神の子と同じレベルに置くなら、それは真の意味でのマリア的な信仰に固有のダイナミズムとは似て非なるものとなります」（66）。

「もろもろの恵み」（*Le grazie*）（67-70）では、「いくつかの称号、たとえば**〈すべての恵みの仲介者〉（Mediatrice di tutte le grazie）**といった称号は、マリアの独自の役割に関

する正しい理解の妨げとなる限界をもっている」（67）ことを示す。

> 実際、最初にあがなわれた者であるマリアが、自らが受けた恵みの仲介者となることは不可能です。これは些細なことではありません。なぜなら、それは次の中心的なことを示しているからです。すなわち、マリアにおいても、恵みのたまものはマリアに先行しており、キリストの功績を予見しつつ、三位一体の神の絶対的な意味での無償の働きかけからもたらされたということです。マリアはわたしたちと同じように、何らかの先行する働きによって義とされる功徳をもっていたわけでもなければ、その後の働きによって義とされる功徳をもったのでもありません。マリアにとっても、恵みによる神との友愛はつねに無償で与えられるものです。（同）
>
> 68　別の意味において、先に述べた称号は、マリアが、わたしたちのイエス・キリストとの個人的な関係とのつながりなしに、霊的な善ないし力の分配者に変わるかのように、神の恵みを示すおそれがあります。とはいえ、人生のさまざまな瞬間におけるマリアの母としての支えを表す「恵み」という表現が、受容しうる意味をもつことは可能です。複数形の（もろもろの）恵みは、主がマリアの執り成しを聞くことによってわたしたちに与えることができる、物質的なものも含めたすべての助けを表します。これらの恵みは、わたしたちの心が神の愛へと開く準備を整えるための助けともなります。このようにしてマリアは、母として、他のいかなる聖人が示すことができるものにもまさる近さをもって信者の日々の生活のうちに存在します。
>
> 69　マリアは、その執り成しを通して、「助力の恩恵」（gratia actualis）と呼ばれる聖霊の内的な促しをわたしたちのために願うことができます。これは、罪人のうちにおいてさえも彼らを義化するために準備するために働き、さらに、すでに成聖の恩恵によって義とされた者において彼らの成長を促すために働く、聖霊の助けです。「恵みの母」という称号は、このような厳密な意味で解釈されなければなりません。マリアは、わたしたちが主に心を開くことができるために、謙遜に協力します。主は、成聖の恩恵の働きによってわたしたちを義とすることができる唯一のかたです。つまり、主は、わたしたちのうちにご自身の三位一体のいのちを注ぎ込むとき、わたしたちのうちに友として住み、わたしたちをご自身の神的ないのちにあずからせます。これは主のみが行うわざですが、次のことを排除するものではありません。すなわち、マリアの母としての働きを通して、信者が、人生の中で前に進み、主が注いでくださる恵みに対して心を整え、無償で与えられた恵みのいのちのうちで成長するための助けとなる、ことばやイメージやさまざまな促しを得ることができるということです。

したがって、「マリアがさまざまな「動き」を引き起こし始めるとき、それはつねに、わた

したちの存在の内奥で働く唯一のかたへとわたしたちの人生を開かせるための促しとして理解されなければなりません」(70)。

「解説」の〈民の母〉が述べるとおり、本文書の標題である、結びの「信じる民の母」(*Madre del Popolo fedele*)(76-80)は、「民衆的なマリア信心」(una pietà mariana “popolare”)(79)の教会的な意味を改めて強調している。